

○十一月八日午後六時より、築地賣家に於て、吉武吉雄氏東京本社へ榮轉につき其歡迎を兼ね、慶早戰對策懇談會を開催す。

出席者（順次不同）

青木會長、飯塚師範、中村、東野、峯岸、菅原（卓）、近岡、松本、飯塚、下川、塚本、吉武、鈴木（伊）、岡、佐野、宮永、松尾、野田、山本（誠）、太田、茂木（信）、島、三村、阿部（秀）、五島（次）、古賀、岩崎（三）、桐山、高松、葉山

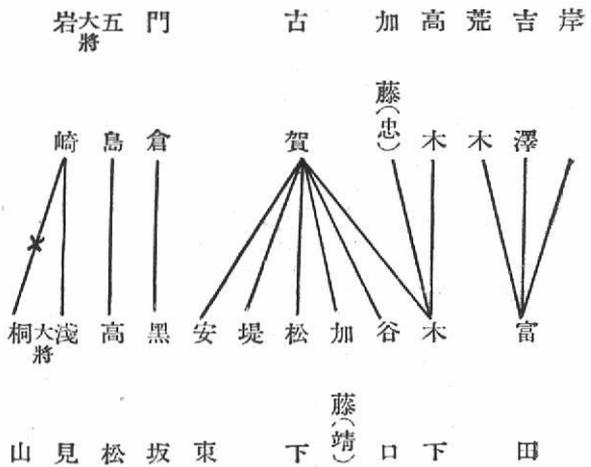
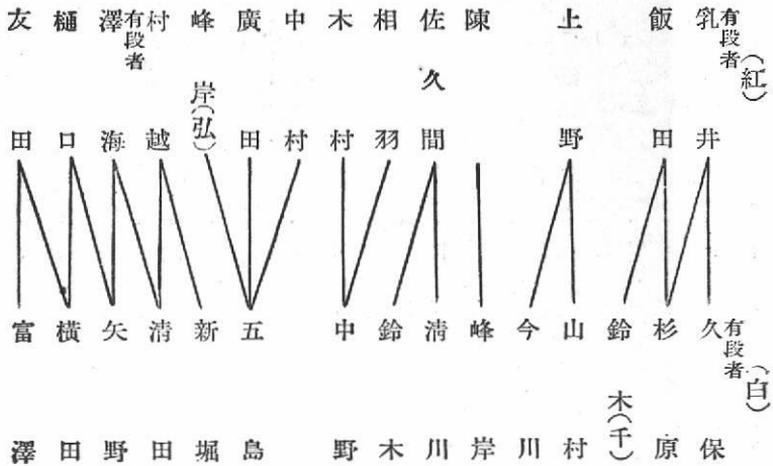
三三 昭和四年史

(一) 寒 稽 古

一月十四日より二月三日迄三週間、毎朝四時より例年の如く綱町道場に於て寒稽古を行ふ。尙本年は五島次雄君寒稽古を十年間精勤して、柔道部に盡したる功顯著なるを以つて、特に三田柔友會より記念品を贈られた。

(二) 卒業生送別紅白勝負

二月十日



十人掛

四段 古賀 徹

(所要時間二十分)

○○○○○○

- 一級峰 岸(拂卷)
- 同 村 越(同)
- 同 五 島(同)
- 初段澤 海(大内刈)
- 同 樋 口(押込)
- 同 富 澤(足拂)
- 同 加 藤(忠)(押込)
- 二段木 下(大内刈)
- 同 松 下(跳卷)
- 同 堤 下(大内刈)

四段 岩崎 三郎

(所要時間三十分)

○○○○○○

- 一級峰 岸(背負返)
- 同 村 越(跳腰)
- 同 五 島(拂卷)
- 初段澤 海(背負)
- 同 樋 口(合業)
- 同 富 澤(大外刈)
- 二段加 藤(忠)(跳腰返)
- 同 加 藤(靖)(合業)
- 同 松 下(大外刈)
- 同 堤 (合業)

四段 門 倉 森

(所要時間十三分)

○○○○○○

- 一級峰 岸(跳腰)
- 同 村 越(大外刈)
- 同 五 島(跳腰)
- 初段澤 海(同)
- 同 樋 口(同)
- 同 富 澤(同)
- 二段加 藤(忠)(同)
- 同 木 下(大外返)
- 同 松 下(跳腰)
- 同 堤 (同)

右終了後、四谷三河屋に於て送別會を開く、出席者左の如し。

柴田部長、飯塚師範、中野師範、吉武吉雄、峯岸鎮治、島 泰次郎、中野森藏、岡 善次、宮永金太郎、淺見淺一、
山岡吉之助、 外現部員 三十三名 計四十四名

本年度卒業生

四段 岩崎三郎、五島次雄、古賀 徹、門倉 森

三段 山田潤次郎

二段 中島政雄

初段 荒木敏之、吉澤竹治郎、岸 賢雄

一級 大谷木政雄、宮田勝善

(三) 昭和天覽試合と塾出身の選士

今上天皇御即位御大禮を奉祝せんが爲に、本年五月、四日と五日の兩日に互りて、全日本の武道大會が宮城内に開催せられた。其第一日には皇族各宮殿下の臺覽を仰ぎ、第二日には天覽を仰ぐといふ空前の壯舉であるから、同年一月より宮内省内斯道關係者間に、萬全の準備が進められた。永い歴史を持つ日本の武術の種類は決して少ないものでないが、限られたる時間内に武術の粹を天覽に供するのであるから、演武の種目は劍道と柔道との二つに限られることになった。

さて出場選士の選定方法を如何に定むるかは、頗る難問題であつて、種々の議論が湧いたのであるが、結局その方法と

して決定せられたのは、府縣知事に依頼して管内武道専門家を除く範圍より選士一名宛を選出せしめ、其他に宮内省に於て、一定の方法に依り全國的に主としに武道専門家中より選士若干名を指定し、右府縣選士指定選士を各別に試合せしむるといふことであつた。此の二つの方法に依りて選出された選士は、指定の部に於て劍道柔道各三十二名、又府縣の部に於て劍道柔道各五十一名宛のところ、柔道の方では岡山縣が失格し、沖繩縣では適當の者が無かつたので、二名缺けて四十九名が選定されたのである。

柔道指定選士三十二名の諸氏は、何れも斯界の權威者で、多くは専門家であるが、其中に我が柔道部出身者にして非専門家たる東邦電力社員（五段）阿部大六、大日本製糖社員（五段）阿部英兒及び滿鐵社員（五段）淺見淺一の三氏が之に加はつてゐる。何等の豪華ぞや。

又柔道府縣選士の四十九名は、専門家に非ざる者より選出された人々であるが、之れ亦斯道に於ける剛勇無雙の者ばかりであつて、其の中にも亦同じく我が部出身者たる大同電力社員（五段）山川涉氏が、大坂府を代表して之に連つてゐるのは、彌が上にも我が義塾柔道部の名を高からしめたものと云はなければならぬ。

五月四日、愈々御大禮記念全日本武道大會の第一日となつた。會場は宮城内濟寧館であつた。

柔道府縣選士四十九名、之が十二部に分れて試合せる中、山川涉氏は其第三部に屬し、第一回戦に於て三重縣選出の三段中尾健二郎氏を大外刈返に倒して先づ一點を擧げ、次なる宮崎縣選出の初段太田清一氏をも鮮かなる釣込足に破りて二勝を得。更に靜岡縣選出の四段蓑原宗一氏と二勝者同志の接戦となれば、早くも山川氏の釣込足に業あり、蓑原氏は前試合に於て受けたる胸部打撲傷の爲め試合を繼續すること能はざるに至つたので、山川氏は第三部の優勝者と決せられた。

第二回戦に於ては、前記十二部の優勝者が四部に分れて試合するのであつた。山川氏は第二部に屬し、富山縣代表の二段關口保平氏、宮城縣代表の五段富木謙治氏と戦はなければならなかつた。其結果敏捷を以つて鳴り寝技を以つて得意と

する關口氏に對しては、裁定にて勝、立技寝技共に秀でたる富木氏に對しては、激戰中富木氏肋骨捻傷を受けたる爲め試合は中止となり、之れ亦裁定にて山川氏の勝と宣告せられた。かくて全勝の山川氏は第二部の優勝者となり、明日晴れの御前試合に出場すべき、柔道府縣選士四名の中に加はることになつた。

次は柔道指定選士の試合である。技倆拔群なる強豪全日本の専門家の間に、我が阿部兄弟と淺見氏とが加つて三十二名。之が八部に分れての激戰猛闘である。

其第一回戰。先づ第三部の阿部大六氏は五段白井清一氏（柔道師範）と戰つて跳腰返しに勝、六段尾形源治氏（山形高校師範教士）と取組み、惜くも押込に敗れたが、次なる五段古澤勸兵衛氏（京城警察講習所師範教士）を拂腰にて投げ飛ばし、三戰二勝の成績を挙げ、第三部の次點者となつた。

次に淺見淺一氏は第四部に屬し、最初に五段小谷澄之氏（大連工業専門師範）と立合つたが、二十分間にして勝敗なく審判の命によつて中止、裁定の結果小兵ながらも精悍なる小谷氏に勝を讓る。續いて教士六段末次哲朗氏（山口師範教諭）と相對し、跳腰を以つて老練なる敵を壓迫せしが、機を見て打出したる大外刈其功を奏して茲に一點を擧ぐ。更に教士六段佐藤金之助氏（警視廳師範）との戰となつたが、機敏なる敵の巴投と押込に惱まされ、遂に足拂に身を躡はすひまもなく打死を遂げたるは是非もなかつた。

阿部英兒氏は如何。氏は第六部にあり、對手は滿鐵の師範六段山田行正氏、甲南高校教諭五段後藤素直氏及び柔道師範六段天野品市氏の三教士である。先づ山田氏との立合に於ては、戰ふこと僅に三十五秒、手練鮮かに送足拂を打てば、斯界に勇名を馳せたる剛の者も空を仰いでドウと倒る。次なる後藤氏をも物の見事に足拂に投げ飛ばし、最後に天野氏との取組になつたが、天野氏は先刻來の脚部の打撲傷にて試合繼續不可能に陥つた爲め、戰はずして阿部氏の勝となり、天馬空を行くが如き阿部氏は、茲に天晴れ第六部の優勝者となつた。

右柔道指定選士八部の優勝者八名は、今や第二回戦たる準々決勝に入る。第六部の優勝者阿部英兒氏は、第五部の優勝者たる京城警察講習所師範五段岡野幹雄氏と組合はされた。正にこれ當代稀に見る強豪の一騎打、孰れが勝つて明日の天覽試合に出場の榮冠を得べきか。

偉軀堂々たる阿部氏に對する老巧精悍なる岡野氏の血戦。やゝあつて阿部氏拂腰に大外刈に刻一刻敵を壓すれば、岡野氏も亦其鋭き足拂と絞技とを以つて逆襲する。纏て敵の虚を衝ける阿部氏の小内刈一閃するよと見れば、岡野氏之に致命傷を得て阿部氏の勝は、人をして思はず快哉を叫ばしめた。

斯くて我が柔道部出身者にして、明日の天覽大試合に出戦の榮譽を荷ふに至つたる者茲に二名。即ち府縣選士の部に於ける山川涉氏、及び指定選士の部に於ける阿部英兒氏。

翌れば五月五日、全日本武道大會の第二日目である。会場は前日と異なる舊三の丸覆馬場。此の日長くも 天皇陛下御親臨あらせられ、我が國民精神の發現たる武道の粹を親しく贊はせられんとするのである。出場選手一生の光榮何ものか之に加へんや。

前日に優勝したる四名の府縣選士と、同じく四名の指定選士とは、ともに千軍萬馬の間を馳驅して、武功燦として輝ける者、更に馬背一鞭長驅して、力かぎり根かぎり奮戦又力闘、最後の絶勝を獲得しなればならなかつた。

府縣選士準決勝試合

第一陣を承つたるは我が山川五段、之に對するは福岡縣の四段木原久夫氏（八幡製鐵所員）である。木原氏は五尺八寸の大兵剛力、山川氏は五尺四寸にして鐵壁の如き堅腰。双方暫く自重して自護體を續くる中、山川氏機を見て奮進一番釣込腰に敵を屠らんとして之を連發すれば、對手も左る者金剛力に能く之に耐へて其裏を取らんとはする。さらば斯うよと

左内股に敵を襲へば、長軀の木原氏に之が利かず、却つて袴帯を取つたる木原氏の深く入つた強引な右大腰に、山川今は堪へ切れずして、雄圖空しく御前に打死を遂ぐ。

指定選士準決勝試合

其第一戦は、五段阿部(英)對教士六段栗原民雄氏(京都武專教授)の血戦であるが、兩氏の力闘は次項飯塚師範の筆に成れる戦評に詳かであるから、茲には略して述べない。唯兩雄能く戦ひ、いづれを勝とも判じ難き程の好取組であつたが、裁定に依つて栗原氏の勝と宣せられ、阿部氏は流星光底に長蛇を逸した觀があつた。併し此の試合を通じて阿部氏の相手方に對して發揮したる武士の情ある態度は、觀者をして稱讃措く能はざらしむるものあつたことは、嘗に本人のみならず、我が道場の譽れなりと謂ふべきである。

因に我が飯塚師範は終始本大會に關係せられ、指定選士銓衡委員に任命せられたる外、試合の審判員に選定せられ、又中野助手も審判員となり、共に武道の精華を發揚するに極力盡瘁せられたことを茲に附記して置く。

(四) 阿部兄弟の奮闘

斯の親にして斯の兒あり

飯塚國三郎

昭和四年五月四日兄弟打揃ひて御前試合に召されけるをうれしみて

優子

雲井までのほるも嬉し松さかに

す立し田鶴のつはさならへて

(阿部家は芝區松坂町に在り、大六、英兒兩君皆其處で母堂優子の手で育つたのである)

かたすともよしや岩根の男子松

露もみたれぬ心し見ゆれ

全日本の柔道界より、天覽試合に出場すべき、名人、達人、卅二名が指定選士として選定せられた。これは宮内省に於て、柔道界の宿老として召集せられた山下義韶八段、磯貝一八段、永岡秀一八段、飯塚國三郎八段、佐村嘉一郎七段、田畑昇太郎七段の六名が委員に任命せられ、その連記無記名投票に依り嚴選せられたのであつた。

嘗て斯界に、慶應の阿部兄弟として、若人の間に一敵國として睨まれた麒麟兒があつた。其兄弟は四人とも五段といふ學生界には稀なる大選士であつた。が、今は既に學校を卒業して、何れも法學士といふ肩書のある紳士、而も揃つて一年志願兵の砲兵歩兵の少尉殿であり、會社員となりて、皆獨立の家庭を造り、一兒或は二兒の親となつて居るが、當年の元氣少しも衰へず、柔道の技術、力量、益々旺盛なるものがあつた。故に其名聲が尙未だ消へ失せては居らなかつたから、大六、英兒の二君が名譽ある選士に拔擢せられたのである。

指定選士卅二名は、専門家ばかりといふやうに選出せられたが、其中に三人だけ素人が加はつてゐた。

曰く阿部大六、身長五尺七寸、體重廿三貫

曰く阿部英兒、身長五尺七寸、體重廿五貫

曰く淺見淺一、身長五尺九寸、體重廿七貫

皆往年の慶應大學生として、柔道に精進し、武名をなした者である。

寛永の御前試合なるものは、武道の奨励となり、武藝の妙諦をも傳へて、今日尙國民の血を湧躍せしむるものがある。昭和の天覽試合は、明治時代の大建設から、大正の文化を経て來たのであるから、武道史上更に錦上添花を添へた感がある。

正しく、朗かに、而て強く、明かなるものが、武道のほまれである。公明正大の旗色を鮮明にした宮内當局の意思が、この大試合に直面して如何に展開せられたか、萬代未聞といふやうな、選士の緊張ぶり、即ち武勇潤達とやいはん。勝敗を超越した、力一ばい、心の張りきつた戦ひは、恰も龍攘虎搏の如く、傷つくも、敗るゝも、全くわるびれずして禮を失はず、又勝者驕慢の體更になく、始終一貫して統制紊れず、歩武堂々として進行したこの立派なる選士の行動を觀ては、指定選士の選抜から審判の責任者であつた吾々は、感激的に胸が詰まるのを覺へた。

阿部大六氏は、武徳専門學校出身で朝鮮に其人ありと知られたる、猛將古澤勘兵衛氏（五段、明治神宮優勝記録者）と第一戦に對陣したが、共に體格の勝れた偉丈夫である。堂々たる姿勢態度で、攻めつ防ぎつ相撲つ技の鋭さ、何者をも打ちくだかねば止まぬ其勢で亂撃致合、古澤勝負の機を見出しけん猛然一撃せしところ、阿部巧みに體をかはし、古澤の體勢崩れたる間一髪、手練の左拂腰を以て投げ捨てし技の立派さ、さしもの剛猛古澤の巨體、もんどり打つて倒れたり。

白井清一氏（五段）、體驅勝れ都下に聞へ高き新進の人なり。嘗て講道館試合に於て十二人の四段を、得意の跳腰にて投げ飛ばして、抜群として五段に進級したる大剛なり。當日武者振り勇ましく阿部と立ち合ふ。白井は平常の豪氣一氣に勝を制せんとし、百鍊の鐵腕を眞向に振りかざして攻めつけたり、阿部は輕妙に之を受け流しつゝ、機を見て其返業を打ちいとも見ごとに打ち破りぬ。

尾形源治氏（六段）、東北の雄、武徳會赤心團の重鎮として重きを爲す。體重、身長、阿部に對して遜色なく、寧ろ専門的鍛練に於て勝るもの、當日善戦したる老巧の士なり。阿部と立合ふや否や、一氣呵成に横捨身に猛襲して戰機を握る。

阿部は之れが爲めに逆襲の時なく、遂に攻めたてられて押込に敗れたり。

阿部英兒氏對山田行正氏（六段）、明治神宮優勝記録者山田選手は、滿鐵柔道界の巨星として夙に令名ある人、百戰老巧の器として知らる。立合ふや弱冠何事か爲すの力ありやといふ元氣眉宇に現はれ勇敢に引組み、巴投の渦中に敵を投げ入れ、混亂せしめて押込み、阿部の首をかゝんとす。其策戰を看破したる阿部は、軽く巴投を防ぎ、一步進みて加ふるに敵勢を挫きしより、山田は機敏に跳ね起きさま、瞬間に得意の内股にて敵を攻めたて、勝を制せんとしたる間一髮の危機にありて、阿部は悠然として身構へ、足拂の一撃にて敵を起つ能はざらしむ。時に滿堂水を打ちたるが如く、感激する。

後藤素直氏、當時五段なりしも、高等師範武道科出身にて關西に名あり、立業の妙手として知らる。彼は武運の拙かりしにや、組み合ふや否や攻めたてられ、一分時にして水を漏らさざる理攻めの足拂に敗れ終んぬ。阿部氏の勝は實に無人の境を行くが如し。

天野品市氏（六段）、棄權の爲め阿部氏の勝。之にて一回戰の優勝者として、次の二回戰に出場の權利を得。

岡野選手（五段）は、滿鐵と全朝鮮との對抗試合に於て、朝鮮方の主將として戰功あり、武名嘖々たる者、闘志盛なる精神の器材なり。既に第一回戰に善戰優勝して、第二回戰に入り阿部氏と相見ゆるに至る。彼は修行時代阿部氏の後塵を追ふて進み來れる者なれども、其技の進歩を認められ、今は朝鮮に柔道師範として勤務する身とて、以前はどうあらうとも、今は負けられぬ勝負。大敵阿部を向ふに廻し、堂々と對陣して一步も譲らず對抗した腕前は、たいしたもの。左にかまへ、背負投に敵を牽制し、大内刈に攻めたて、而て足業で敵の得意をものにしようといふ策戰である。而て一朝もつれあつたら、鍛へに鍛へし周業にて勝負の鑰を握らうとした様子であつたが、之に對して阿部は滿を持して容易に近かず、位攻めにして渡り合ふた。而て敵勢の衰ふるのを急撃しようといふ風して、少しも自らの得意の太刀先を現はさず、機熟するを待つて居つたが、終に其時は來た。敵の廻り込む所を、大内刈で突き落すやうにして勝つた。

天覽試合 時は端午の五月五日、晴天なれども風強く、寒氣身にしみわたるも、選士の顔は汗ばみて輝く。陛下には御機嫌麗はしく出御あらせられ、皇族方は御近く御着席遊ばされ、文武百官 朝野の名士 三千人陪觀せらる。

阿部氏對栗原氏、栗原氏は六段、武徳専門學校教授にて武徳會柔道を代表したる強剛の選士なり。今を盛りの卅有四歳身長五尺四寸、體重廿貫餘りにて、大兵肥滿ならざるも、膂力衆に勝れ、其釣込腰の一手は、前日の勝負にも現はれ、又固業にて新進須藤選士六尺大の首を絞めて勝を制したる威力は恐るべきものあり。阿部之に立合ひ、例に依て姿勢正しく押へつけるやうにしてぐんぐん攻めつけ、敵の動靜を窺ふ。栗原は老獺とやいわん、左半身に身構へ、阿部の水月(急所)の上を左手に握り、右手袖口近く堅くとりて、阿部の運動をさまたぐ。之が爲めに阿部得意の拂腰、大外刈、足拂の機會を見出す能はず。栗原も防禦姿勢の爲めに、自ら有利に展開の機なく、追ひ詰めらるゝ苦しさ、巴投、釣込腰の業を試みたるも、固まりて命中せず。又引き込み押込に入る機會もなかりし。而て偶々栗原技に入らんとして自ら膝をつく、其時阿部は一度栗原の手を振り切り、武裝を整へんとしたるに、栗原猛襲背面より飛びつき、其手咽喉に迫まる。阿部不意を襲はれ、少しく狼狽せしも、冷靜に身を處し、倒れて敵の咽喉を扼するを防ぐ、栗原はこの一舉に勝を制せんとし、力の限り攻めつけても、阿部は一段不利に身を沈めながら、之を軽くあしらつてもものにせず、數分時栗原の爲すがまゝに唯防ぎしが爲め、後に審判はこの爲めに栗原の勝を宣するに至りしこそ遺憾なりし。然れども後この審判の疑問、斯界に暗雲低迷せしが如し。

扱て審判員は分れと號令し、起て再戦せしむ。阿部はこの亂闘に傷つき、口邊より血を流したるのみならず、栗原の攻撃、勢の然らしむるとは云へ、眼にも指を突き込まれ、少しく負傷したり。併し武人として平常に覺悟はあり、阿部は意にも介せず奮闘せしも、栗原は既に心に優勝を期したるものによ、このまゝ引分的の防禦を爲すのみ。阿部も乾坤一擲の機會來らず、規定の時間は過ぎ去りて、既に半刻を費したれば、戦は止められぬ。かくて阿部は勝者の權を失ふ。

嗚呼敗れたりと雖も阿部兄弟並に淺見氏の善戰は、一般に認めらる。審判者永岡八段の如き、當日の新聞に阿部兄弟の技術衆に擢でたるに感心せられたと講評し。又座談會に於て阿部の態度、技術の秀逸を思ふと語らる。素人にして専門家の強豪を凌駕したることが斯界を衝動した。が、私をして云はしむれば、かゝる現象は當然だと思ふ。阿部は修養的に柔道を研究したのである。勝負的に或は競技として柔道を取り扱ふてをらぬところに、出色の點ありと認める。夫れ打つ太刀よりも、太刀とる人の心に威力を感じるのが、武道の眞髓である。阿部兄弟に今日の榮譽あるも亦宜なるかな。

大正乙丑十四年冬日爲阿部君

予曾遊湯河原客舍時有阿部泰藏夫妻在座氏者福澤門下之高足而保險業之先覺也偶論及子弟之教育夫人之貞淑而賢明使四兒以柔道爲心身之鍛鍊而四兒皆從順守分甞勉不怠十年研鑽所成不空簡而文剛而仁明智術道拔衆大六英兒二兄座五段芳郎秀助二弟相次進四段是所稀見也請四子自重而勿背世之期待云爾 國堂謹書

(五) 新入部員歡迎紅白勝負

五月十一日

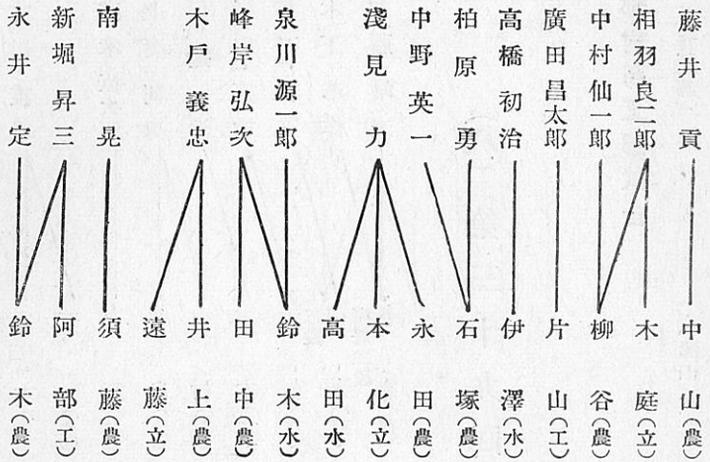


(本塾)

段外

段外

(聯合軍)



三三 昭和四年史

門田 重夫 初段 永(農)

城崎 榮之助 初段 吳(農)

樋口 良作 初段 荻原(工)

野田 一 杉浦(立)

清田 惣三郎 奥村(農)

富澤 康吉 金子(水)

大山 元 名和(立)

矢野 進一郎 友添(農)

德田 實 青木(農)

佐野 隆則 加藤(工)

齋 藤(水)

横田 喜一郎 中田(農)

二小段 田(農)

大昌 政次郎 石澤(立)

渡邊 重男 二本村(立)

岩 下(工)

六三



(八) 第三十九回大會

十月二十六日

普通部對商工部試合

(普通部)

菅原 誠

(商工部)

篠崎 清司

江南 良治

廣川 謙三

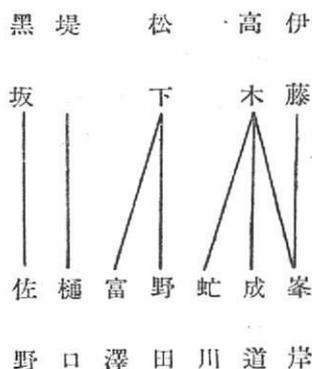
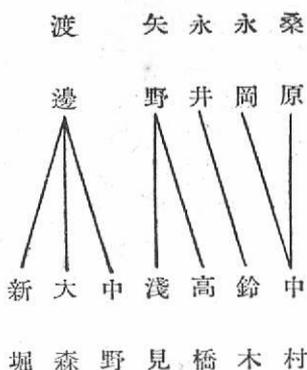
藤山 洋吉

金澤 宏二郎

井上 正夫

小西 和夫

駒井 恒俊



紅白勝負 (紅)

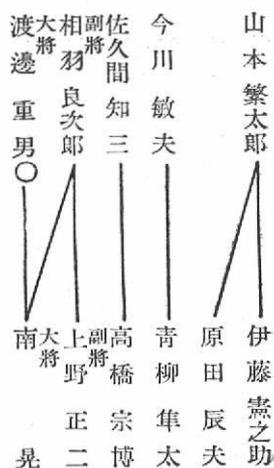
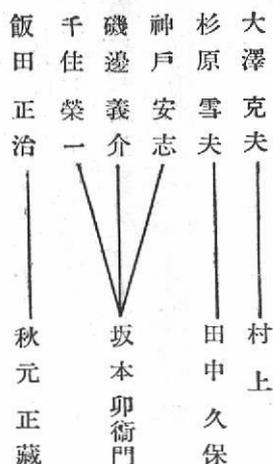
(白)

形

固之形
 二段松 下春三
 二段堤 武男

極之形
 三段五島 三雄
 三段高松 徳藏

投之形
 四段桐山 勝治
 三段黑坂 義衛

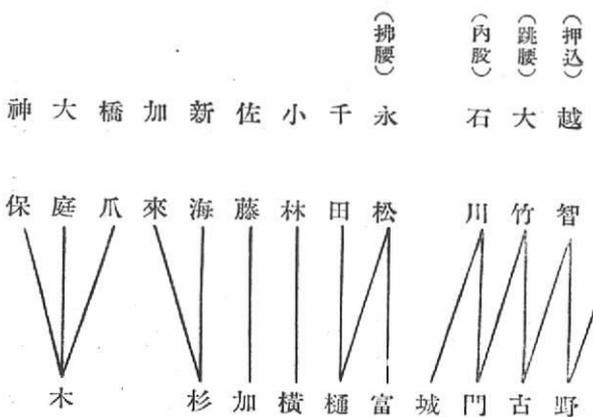
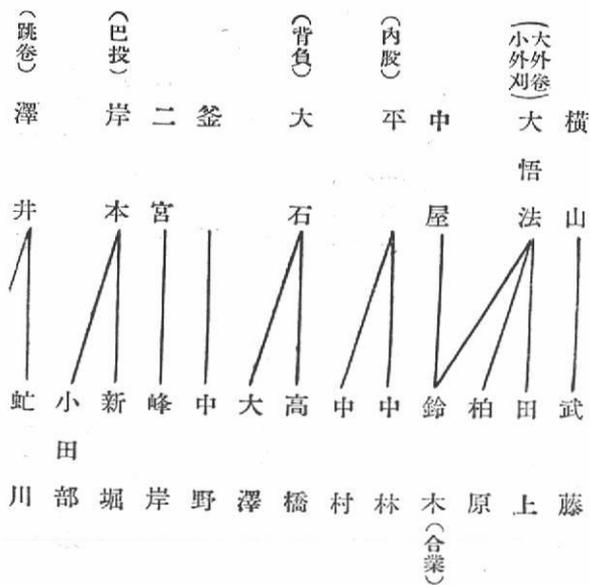


(九) 國士館專門學校對本塾豫科及高等部試合

十一月十一日於綱町道場

(國士館)

(本塾)



下 (足拂)

山 (大外)

藤

田

口 (小内刈)

澤

崎

田 (跳腰返)

張 (小内刈)

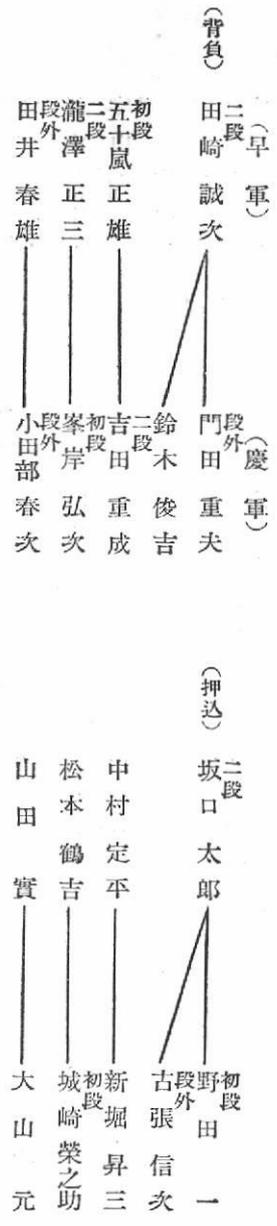
田 (背負)



(10) 第二回對早高試合

十一月十七日午後二時より戸山學校道場に於て舉行、第二回早稻田高等(第一)學院對本塾豫科高等部の試合である。今回は我軍不幸にして敗戦に了つたが、終始正々の陣を張り堂々の態度を保持して戦つたので、柔道界革正の爲め負けて悔なき立派なる奮闘振りであつた。

(個人試合時間は大將十分、副將以下八分、四將以下七分)
 審判 六段 小田常胤氏(段級の表示なきものは前に同じ)



三三 昭和四年史

二段 宮田 晴明 | 初段 佐野 隆則

杉本 日出吉 | 二段 加藤 靖夫

宇山 利雄 | 初段 樋口 良作

小田 佐太雄 | 二段 横田 喜二郎

吉田 啓 | 二段 木下 草作

赤山 政治 | 富田 忠三

二段 渡邊 不藏 | 六三六 上妻 利男

三輪 榮三郎 | 副將三段 崎 幸男

田中 榮三郎 | 大將三段 片山 正周

泉 忠保 | 木

根本 實 | 大將三段 伊勢 治◎

(一一) 雜記

現在幹事

現在の幹事左の如し。

(四段) 桐山勝治 (三段) 高松徳藏 (三段) 浅見 勇 (三段) 五島三雄 (二段) 加藤靖夫

天覽試合出場選士祝賀會

五月十一日午後六時より三田綱町道場に於て舉行、阿部大六、阿部英兒、山川涉の諸氏(浅見浅一氏は社用にて出張の爲缺席)を中心に、會員並に現部員多數出席し、林塾長も特に出席の上、懇篤なる祝辭並に激勵の詞を述べられた。其他先輩諸氏の祝辭等あり、頗る盛會であつた。(柔友會主催)

當日は柔道部新入部員の歓迎勝負が開催されたが、その勝負終りて後、阿部英兒氏は農大首腦者七八掛をなし、僅々九分開にて美事に之を薙ぎ倒し、天晴れ天覽試合出場選手としての貫録を示した。一同其技の洗練と精力の旺盛なるに感歎せざる者とはなかつた。

祝賀會出席者左の如し（順序不同）。

主賓 阿部大六、阿部英兒、山川 涉、淺見淺一（缺）、林 塾長、飯塚、中野兩師範

青木徹二、平沼亮三、須藤久藏、諸遊慎吉、大塚壯亮、中村愛作、吉武吉雄、山川勉吉、松尾恒四郎、永瀧松之輔、

峯岸鎮治、中村壯吉、塚本福治郎、島 泰次郎、近岡源三、藤平 眞、谷村龜吉、鈴木元吉、岡 善次、八城伍七、

小林武次郎、岩垂捨三、菅原 浩、福澤時太郎、三村徳五郎、野尻東一、阿部秀助、齋藤 一、葛原元武、長谷川繼彌

古賀 徹、高橋貞作、宮永金太郎、太田次雄

外に學生（現部員）及び農大柔道部員五十一名、計九十三名

飯塚師範國士館武道専門學校教授就任

水野鍊太郎氏校長の東京市外世田ヶ谷、國士館武道専門學校に飯塚師範は教授として就任せられた。

中野師範昇任

従來山下義韶氏の就かれてゐた警視廳巡回師範に、四月二日附を以て中野正三氏が昇任せられた。

慶早戦出場選手激勵會

最近大阪より歸京の石渡泰三郎氏及び海外より歸朝の岩崎清一郎兩氏の歓迎を兼ね、十月二十四日午後六時より綱町道

場に於て開催。選手を中心に和氣霽然たる裡にも頗る緊張せる會合であつた。

尾山委員より激勵並に兩氏歓迎の挨拶をなしたるに對し、兩氏の謝辭に次で片山首將力戰の覺悟を披瀝したる後、吉武氏、木村氏並に日光より特に出席せる中野森藏氏等起ちて、花も實もある激勵の辭を述べ、大に選手一同を激勵する所があつた。(柔友會主催)

出席者左の如し(いろは順)

石渡、岩崎兩氏並に飯塚、中野兩師範

青木會長、飯塚(茂)、岩崎(三郎)、葉山、近岡、尾上、尾山、太田、神崎(清一)、門倉、吉武、谷村、谷口、中村(愛作)、中野(森藏)、野田、松本、小林、出口、淺見(又藏)、阿部(革兒)、安藤、阿部(芳郎)、阿部(秀助)、淺見(淺一)、木村、峯岸、宮永、島(泰次郎)、鈴木の諸氏並に選手及現幹事等四十名 計七十四名

慶早戰出場選手慰勞會

十一月十七日陸軍戸山學校に於ける對校試合會は早稻田と熱戰の末我軍遂に利あらず、前記の如き結果を來せるを以て、一同選手と共に綱町道場に引揚げ慰勞會を催した。舊部員並に現部員多數出席の上戰績を語りつゝ深更に及んだ。

席上高橋委員長起つて一場の挨拶をなし、且つ懇ろなる慰勞の詞を述べれば、片山首將悲壯なる謝辭を述べ、臥薪嘗膽の上明年度は斷じて彼を敗るべしとの決意を述べた。

次で柴田部長、飯塚師範、吉武氏、尾上氏等交々起ちて、縦令形の上にては敵に勝を譲りたりとは云へ、其態度其氣概に於ては斷然彼を壓し、實質上の勝は當然我に在る旨を述べて一同を勵まし、且つ慰めた。

進級一括

○五月二十三日附進級

一級へ 永井 定、淺見 力

○十一月四日附進級

一級へ 中村仙一郎、鈴木俊吉

○十二月進級

二級へ 今川敏夫、峰岸 猛、相羽良次郎

(一一) 三田柔友會記事

柔友會委員會

三月廿五日慶應俱樂部に於て開催、左の件につき協議せり。

一、後任委員選定の件

一、大阪支部集金に關する件

一、會員の住所整理に關する件

一、勝負法改正に關する件

天覽試合指定選士の件

四月九日午後五時より交詢社に於て 飯塚師範、中村(愛)、吉武、峰岸、中野(正)、三村、阿部(英)、阿部(秀)、淺見、五島(次)、尾上の諸氏會合、左記につき意見の交換があつた。

宮内省主催來月五月四、五日に互り宮城内に舉行の御即位記念武道試合に中野正三、阿部英兒、阿部大六、淺見淺一の四氏全國指定選士として推薦せられたるにつき督勵の件

柔友會委員會

○五月八日午後五時より慶應俱樂部に於て開催。前年度委員長たりし島泰次郎氏の臨席を乞ひ、事務の分擔並に天覽試合出場選士の祝賀會に關する打合を爲した。

出席者 高橋委員長、山本、宮永。

○五月二十八日慶應俱樂部に於て開催。

特に島泰次郎氏並に三村徳五郎氏前年度委員として出席あり、會計事務等全部の引繼を了し、尙本年度會費徴收の打合をなした。

出席者 高橋貞作、尾山和男、宮永金太郎、安藤徳太郎、太田次雄

○六月十一日慶應俱樂部に開催、諸般の打合をなす。

出席者 島、三村の舊委員及び高橋、尾山、山本、宮永、安藤、太田の現委員。

○九月十四日正午古河電機工業會社應接間に於て開催。

今秋舉行の對早稻田との勝負に關し打合をなした。

出席者 吉武、島の兩氏並に高橋、山本、尾山、阿部、安藤、宮永の諸氏。

○九月十八日慶應俱樂部に於て開催。

本年度會費未納者に對する善後策を講じ、併せて對早稻田との勝負に就き打合をなす。本日早稻田の委員と該勝負に關する打合をなしたる柔道部幹事桐山、高松、五島の三君も來り會し、具に双方の意見を聴取した。

出席者 島氏並に高橋、安藤、宮永、太田の諸氏。

○十月十九日慶應俱樂部に於て開催。

對早稻田との勝負に關する打合及び同勝負出場選手激勵會開催に付き打合をなした。

出席者 島氏並に高橋、尾山、山本、宮永、阿部、安藤、太田の諸氏。

三田柔友會關西支部記事

三月十二日鐘紡平賀恒次郎氏京都山科工場へ榮轉せられ、熊本より來任の歡迎會を開く、出席者左の如し。

平賀恒次郎 伊庭 謙造 石渡泰三郎 伊藤 巖 小川虎之助 神谷 新吾 後藤 幹夫

榛葉 達彌 杉 道助 菅瀬 一馬 菅原 剛寛 津田 信吾 土井徹太郎 南 保一

三隅 治義 山中 強三 山川 勉吉 山川 涉 山田 久一